

大正浪漫斯電車

瑞穂国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある女学生は、電車の中でそれは麗しい美男美女を見かける。一目で魅入られてしまった女学生は、毎日電車の中に二人の姿を探す。仲睦まじい二人には、しかし重大な秘密があつて――

※白かぐ大正パロディ小説です。

かぐ告本編の二次というより、語りたいの二次な気がする……

目次

大正浪漫斯電車
大正浪漫斯物語

7

1

大正浪漫斯電車

私が女学生であった頃のお話でわたくしございます。通学に使う市電に、いつも一緒に乗っている、同じ年くらいの学生さんが二人おりました。

お一人は、きりりとした目元と、明るい髪色の男子学生でございました。黒い詰襟と学生帽、外套のよく似合う美丈夫でありました。

もうお一人は、線の細い顔立ちと、雅な黒髪的女子学生でございました。矢絣の着物に女袴、革靴のまばゆい大和撫子でありました。

雑多な市電の車内にあっても、はっと息を飲むような華やかさのあるお二人であったのです。ですから私は、名も知らぬお二人を、心の中で「光様」、「紫様」などと呼びしておりました。

私がお二人を初めてお見かけしたのは、忘れもしません、女学校四年の、冬でございました。

その日は雪がちらついて、寒い夜でございました。誰もが身を縮め、手をすり合わせて寒さを耐えておりました。そんな冬の電車に、あのお二人も乗っておられたのです。

椅子に座った紫様の、その前に光様が手すりに掴まっておりました。某かをお話になっているお二人の姿が、混み合う車内であっても、私には随分鮮明に見えたのです。雑然としたこの世界で、お二人の周りだけが、清らかなせせらぎのように、美しいものに思えたのです。それほどに麗しいお二人のご様子でございました。

ええ、ですから、絵画や御伽話の住人のような美男美女のお二人に、私は一目で心奪われてしまったのです。

市電に乗り込んでからというものの、私は終始、お二人の方を見つめておりました。声など聞こえたりはしませんでした。お二人はそれは楽しそうに、お話をされておりました。

すると、寒さをごまかすようにすり合わせていた紫様の手を、光様が両の掌で暖め始めたではありませんか。小さな紫様の手は、すっぴりと光様の手に収まっておりました。頬を染めて俯く紫様の横顔があまりにも艶やかで、激しい動悸がしたのを、今でもよく憶えております。

お二人がお降りになるのは、私より四つ手前の停留所でございます。光様が差し出された左手に、紫様が右手を添えられて、お二人で降りて行かれたのです。ああ、それは正しく、話に聞く西洋の王子様とお姫様そのものでございました。

西洋の文化が多く取り入れられたとはいえ、いまだレディファーストの意識が薄い日本でございます。男性が表立って女性をエスコートすることなどほとんどないことでございます。ですから、美男子が美少女の手を引いているという光景が、とても尊く、崇高なものに感じられて仕方がなかったのです。

お二人の姿が車外に消えてからも、私はただ呆然として、あわや降りる駅を逃すところでございます。

それからというもの、私は何かにつけて、お二人の姿を探すようになりまして。

一月もすれば、お二人がいつも同じ時刻の電車に乗っていることもわかりました。ですから私も、同じ時間の電車を狙うようになりました。運が良ければ、目と鼻の先に、お二人の姿を見ることができました。

それから……実にはしたないお話ではございますが、お二人の会話の内容にも、耳を傾けておりました。どんなお話をされているのか、大変興味がありましたし、もしかするとお名前や学校などわかるかもしれないと考えたのです。

お二人は、しかし電車内では常に、「貴女」、「あなた様」と呼び合っておりませんでした。学校のお話もほとんど会話には登場せず、お二人の素性に繋がるものは何一つ得られなかったのです。

諦めの悪かった私は、それまであまり興味のなかった、級友たちの社交界のお話にも耳を傾けるようになりました。あれほどの美男子、美少女ですから、社交界に出ていればさぞかし大きな話題となるはずでございます。

それにもし、公的な婚約者の関係であれば、舞踏会では光様が紫様をエスコートなさっているはず。正装姿のお二人を想像するだけで、胸が高鳴って仕方のなかったものでございます。

……ええただ、ご想像の通り、この方法でも、お二人のことはわからず仕舞いでございました。私は最後まで、お二人の正体については全く掴めなかったのです。ひとたび電車に乗ってしまえば、お二人は確かに私の前におられますのに、現実世界でのお姿が全く見えないのです。その時は、実に大真面目に、御伽話から飛び出して来た方たちなのでは、と思つたものでございます。

他にお二人のお話と申しますと、一つ特に印象深いエピソードがございます。とは言ひましても、あまりに幻想的な光景で、いまだに夢だったのではと疑う時もあるのですが……。

その日は、花火大会の日でございました。私は、川辺にお屋敷を持つ級友のもとで、花火を鑑賞しておりました。

花火を見終わつて、級友たちとお茶など楽しんでから、私は家路につきました。とは言ひましても、さすがに夜も遅い時間でしたから、家の者が車で迎えに来てくれました。私は運転手に全てを任せ、座席でぼんやりと、花火の余韻に浸る夜闇を眺めておりました。

丁度、どこかの橋に差し掛かつた時でございました。川面に反射する月光の中、ふと、橋の上に人影が見えた気がしたのです。車窓から見た二つの人影に、私の目は釘付けになりました。

人影は一組の男女でございました。それはもう、お二人とも大変ウキウキとした様子で、花火を鑑賞した帰りなのだと一目でわかりました。特に女性の方は、まるでダンスのステップでも踏むように、橋の上で袴を翻らせ、リボンを揺らしておりました。男性はそんな女性に微笑みかけ、そつとその手を引いておられました。

ほんの一瞬のことでした。慌てて車窓に張り付き、私は可能な限り、お二人の姿を見ようとしたのです。ですが、車はすぐにお二人の横を通り過ぎて、その姿も見えなくしてしまいました。

ですから、これは本当に、今でも我が目を疑うのです。花火に浮かれすぎて、ゆめまぼろし夢の類を見たのではないかと。とても幸福な妄想だったのではないかと。ですが……私が、あのお二人に限って、見間違えるはずがないというのも、正直なところでございます。

確かめる手段はございません。ですから私は、あの花火の日、きつ

とお二人は一緒に過ごされたのだと、信じているのです。

私がお二人にお会いしてからの一年は、本当にあつという間に、過ぎていったのです。ほとんど毎日、お二人を目にしていた私は、本当に心の底から、お二人のことを好いておりました。ただし、それは当世で言う「恋慕」というものではなく、ただただそこにあるだけでありがたいものとして、好きだったのです。神仏に近い存在とでも言いましょうか。この感情の名前を、ぜひともなたかに教えていただきたいものです。

ともあれ、お二人を初めてお見かけしてから一年が経った女学校五年の暮れも、私はお二人と同じ電車に揺られ、家路についておりました。その日はとても幸運なことに、並んで座るお二人の目と鼻の先に、私は立つことができました。

お二人が降りる停留所へもう三つというところで、光様が呟いたのです。

「アメリカへの出立が、年明けに決まりました。いよいよ、アメリカの学校へ、留学して参ります」

私は我が耳を疑わずにはいられませんでした。光様がアメリカへ留学される。そのようなお話は、これまでお二人の会話の中に、一度として登場していなかったのです。

「……はい」

紫様は、ただただ穏やかに、微笑んでおられました。紫様はすべてご存じであったご様子でした。

「あなた様のことですから、今よりもずっと立派になって、そうしてお国のために尽くしていただけると、信じております」

「はい。一所懸命、勉学に励み、この日本のために、力を尽くすと誓いましょう」

お二人の会話に、私は感情を堪えるのがやっとでございました。

旅客機などない時代でございます。日本国内を移動するのも精一杯の時代に、海外へ渡航するのがどれほど大変であったことか。まして留学ともなれば、渡航費のほかに学費や生活費もかかります。ですから留学する学生のほとんどは、国に将来を期待され、国費や多額

の寄付金で海外へと渡るのです。当然のことながら、帰国後は国のために働くことが義務付けられておりました。

留学している間、数年は帰国が叶いません。場合によっては、その期間が十年に伸びたり、そのまま海外に赴任するということもあったと聞きます。ですからその間に、きつと紫様の結婚が決まってしまうのです。たとえお二人が婚約した仲であっても、いつ帰るともしれない光様を、紫様のお家の方が待つているとは考えにくかったのです。

光様が日本をお発ちになれば、お二人はもう二度と、会うことも叶わないのでございます。端から見えていた私でもわかるほど、仲睦まじく、深く愛し合っておられたお二人が、これが今生の別れとなる会話を、それはそれは穏やかに交わされていることに、私は涙を禁じえませんでした。

お二人とて、別れたくはないはずなのでございます。ですが決して、そのお心を口にするには許されなかったのです。先ほども言いました通り、留学が許されるということは、国に将来を嘱望された証であり、大変名誉あることでございます。ですから紫様も光様も、笑顔で見送り見送られることしか、できなかつたのでございます。

停留所までの間、お二人は一言もお話になることなく、静かに電車に揺られておりました。ただお二人の間に、そつと繋がれる手がありました。揺れる電車に合わせて、紫様は時折、光様の肩に頭を寄せておられた、そんな気もいたしました。

いつもと同じ停留所で、お二人はお降りになりました。初めてお見かけた時から一つも変わらず、光様が手を添えて、紫様が電車を降りて行かれました。私はずっとずっと、電車が走りだしてもなお、そのお姿を見続けておりました。やがてお二人のお姿が、街の闇に消えていくまで、ずっとずっと……。

停留所で降りた私は、ついに堪えきれず、嵌めていた熱い手袋に向かって、泣いてしまいました。

あの日以来、光様をお見かけすることはございませんでした。ただ、しばらくの間は、紫様をお見かけすることができました。紫様はそれまでと変わらずに、同じ電車に乗っておられました。ですがその

お側に、光様の姿はございません。紫様はいつもお一人で、椅子に座っておられました。鈴の声でお話されることも、優しく手を握ることも、桜のように微笑まれることもございません。星の宿る瞳を伏せがちに、時が止まったように静かに、時折りボンを整えて、電車に揺られておられました。そうして、私より三つ手前の停留所でお降りになるのです。

そのご様子が、私はどうしても痛ましくて堪らなかったのです。比翼の鳥、連理の枝とは、男女の深い結びつきを表す故事でございますが、私には正しく、お二人こそがこの比翼連理に思えてなりませんでした。紫様のご様子が、片翼を失った鳥、対を失くした枝に思えてなりませんでした。

結局、私は紫様と同じ電車に乗り続けることができず、以来全く、お二人の行方は存じ上げません。

……あれから十数年が過ぎた今も、あの頃を思い出さずにはいられません。今頃お二人はどうされているのでございましょう。光様は日本へお戻りになったのでしょうか。紫様はどなたかどご結婚されたのでしょうか。最後までお二人の正体を掴めなかった私に、お二人のその後を窺い知る方法はありません。ただもし、お二人が誰か別の方と結ばれたのでしたら……そう考えると、今でも胸の張り裂ける心地がいたします。

ええですから、私はせめて、あの輝きに満ちた日々のことをいつまでも胸に刻んでいようと思うのです。きつと……きつとお二人が、幸せであることを信じているのでございます。

いつか——北太平洋航路に就役した「なぎさ丸」が、初航海から戻った時であったと記憶しております——横浜の港で遠くより見た男女のように、

「お勉め、ご苦勞様でございました……御行様」

「ようやっと、貴女に会えました……かぐや様」

そんな奇跡が、あのお二人にないとも、限らないのですから。

大正浪漫斯物語

私の主人について、多くを語ることは、まかりなりません。とある財閥の、ご令嬢であった、私の主人。お名前も、来歴も、一切、語ることなどございません。女性である私が羨むほどの、豊かで美しい黒髪を持ち主であったと、そのみをお伝えいたしましょう。ええ、その黒髪ゆえに、女中たちからはよく「姫様」と呼ばれておりました、とも。

……しかしながら。それでも、ただお一つ、語らなければならぬことがあるのです。彼女に仕えた侍従としてではなく、幼少よりともに育ち、誰よりも彼女を知る、友人として、語らなければならぬのです。

それは、本当に、短い日々のお話でございます。長く時間は取りません。どうか、最後まで、語らせてくださいな。

これは、敬愛する主人の、短く、儂く、切なく、しかし、尊いほどに美しかった、恋物語でございます。

おそらく、主人の恋物語は、私が知るよりも幾ばくか前に、始まっていたのでしよう。ですから、これは、あくまで私の知りうる範囲のお話でございます。

主人の初恋を、私が知り得たその日は、予報にない秋の雨が、夕方にザーツと降った日でございます。

強まる一方の雨脚に、私は主人の身を案じておりました。間の悪いことに、その時刻は丁度、主人が女学校より帰宅する時間であったのです。朝に傘を持ってはいませんでしたから、これは市電の停留所まで、迎えを出さねばと考えておりました。

女中のまとめ役でありました私は、主人が住まいとしておりました別邸を、他の女中に任せ、主人を迎えに出ようと致しました。

私の分と、主人の分、二本の傘を携え、玄関の扉へと手をかけようとした時でございます。

「ただいま、帰りました」

なんと、今まさに迎えに行こうとした主人が、扉を開いて帰って来

たではありませんか。電車が到着するのには、まだ少しばかり、時間があるはずでございました。ですから、あまりに突然のできごとにより、私はぎよつとしたのです。

その主人はというと、私を見つけて、こうおっしゃったのです。

「雨が降りそうでしたから、少し早い電車へ乗ったのです」

主人の言う通り、いつもより二本か三本、前の電車に乗れば、到着の時間が早くなります。ですが、それにしても、停留所から別邸までを、雨の中どう帰って来たのかと、そう思わずにはいられませんでした。

そして、私の疑問の答えは、主人のすぐ後ろにあったのです。

主人の後ろには、傘を差す男性が立っておりまして。外套を羽織り、制帽を被る姿は、いかにも流行りの男子学生という印象でございました。主人と対照的な、やや明るい髪色と、主人に似た、きりりと凛々しい目元の特徴的な青年で、年の頃は主人と同じくらいというところでございました。

青年は、目の合った私へ会釈をして、こう申されました。

「冷たい雨でしたから、勝手ながら、お送りさせていただきます。――それでは、自分はこれにて」

踵を返す青年へ、主人は、それは華やかな笑みを浮かべ、控えめに手を振っておりまして。あたかも春の訪れのようなその表情は、十余年を共に過ごしてきた私も、一度として目にしたことのないものでございました。

私は確信したのです。主人は、傘の青年を、憎からず想っているのだと。

この時お見かけした青年のお名前を、私はそれほど時間をかけず、知ることとなりました。ですがもちろん、ここで語ることはできませんので……ここからは仮に、「光る君」と、お呼びしましょうか。

その日からというもの、主人は毎日が楽しくて仕方のない、という様子でございました。と言いますのも、朝の支度に掛ける時間が、以前よりも二十分ほど伸びたのです。

少し前より、身支度への申し付けが増えたとは、感じておりました。

すっかりお気に入りの赤いリボンも、光る君を初めてお見かけするより二月ほど前から身につけておいででした。

髪は丁寧に絹でも扱うように。矢絣の着物と女袴には皺なく。きつくはない程度に香を焚きしめて。主人の、あれやこれやという注文に、私は毎朝、付き合っておりました。

もちろん、その分、私の朝の仕事は、それまでも増して過密なものとなったのですが……けれど、その苦勞以上に、嬉しいこともあったのでございます。

朝の支度が伸びた分、主人と話す機会が増えたのです。幼い頃ならいざ知らず、女学校へ入ってよりは、常に口数の少ない主人でありましたから、この朝の一時が、私には何にも代え難い幸福だったのでございます。お互いにまだ無垢でありました頃のように、喜怒哀樂のはつきりとした主人の姿が、それは微笑ましくてならなかったのです。

主人とは、毎朝たくさんのお話をしたものです。大抵は、例の光る君のお話でございました。どんなお話をしたとか、どんなものがお好きだとか、そういうお話を、来る日も来る日も、飽きることなくされるのです。

「あの方は、白馬に乗った、騎士様なのよ」

主人はよく、光る君をそのように例えておいででした。

明治が過ぎ、大正になったとはいえ、いまだ日本には、レディファーストの意識が薄かった頃でございます。女性は男性の三歩後を歩くものと、まだまだそうした、古い考えの根強い時代でございました。けれど、そんな中であって、主人の語る光る君のお姿は、ええ正しく、御伽話に聞く白馬の騎士そのものでございました。私の主人を、それは大切に想ってくれているのだと、そう確信するに足るものであったのです。

主人は、とても聡明な方でございます。その主人が、これほどに恋焦がれるのですから、それは素敵な殿方なのでございましょう。

それから、またしばらくすると、主人はお忍びで、光る君と逢引きをなさるようになりました。本家に怪しまれないよう、月に一度ほど

の頻度でございました。

今風の洋服を着て、髪型も女学校とは違う風にされて、「友人と遊んでくる」という体で、お出かけなさいました。そういう時は決まって、私が本家への隠蔽工作の協力者でございました。

夕方になってお戻りになると、主人はそれは上機嫌に、逢引きのことを話してくるのです。不忍池を散歩したとか、隅田川へ桜を見にいったとか、流行りの活動写真を観に行っただとか、やはり朝のお話と同じように、いくつもいくつも、楽しそうにお話されるのです。お二人の密会を知っているのは私だけでしたし、ですから一層、私に話を聞かせたくてしようがなかったでしょう。

しかし、この逢引きというのも、いつも上手く行っていた訳ではございませんでした。特に、隅田川の花火大会の日などは、主人も私も、大変でございました。

主人の本家からは、時たま、何の前置きもなく、当主直属の使用人が、別邸へとやって参ります。そして、花火大会の日も、本当に突然、二人の使用人が現れたのです。さて、これはどうしたものだろうと、主人と二人、考えを巡らせて、何とか光る君との約束に、間に合わせただけでございます。あの時のことは、今でも、よい思い出でございます。

何度も繰り返すようですが……光る君と出会われて、主人はよく笑うようになりました。たくさんお話をされるようになりました。それはそれは、大層幸せそうな様子だったのです。

妹とも、姉とも、友人とも思い、共に育ってきた主人が、そのように微笑まれていることが、私にとっては何よりも喜ばしいことでした。

しかしながら……この恋が、永遠ではないことも、決して実ることのないものであることも、私も、そして主人も、よく理解しておりました。

男女間の自由な結婚など、まして恋愛結婚など、全くありえない時代でございました。加えて主人は、日本でも五本の指に入る、由緒正しい家柄の一人娘でございます。本家の方針で、いまだ正式に婚約者

などもおりませんでした。主人の旦那様というのは、主人の意志に
関係なく、当主の一存で決まるものであったのです。光る君が、どれ
ほど素敵な殿方であろうと、どれほど主人が深く愛してしようと、二
人が結ばれることは、決して認められるものではありませんでした。

主人と光る君の日々は、それは美しく、きつとこの世界で一番幸福
なお話でございますが、同時にいつ崩れるともしれない、まるで綱渡
りのような、そんなお話でもあったのです。

そして、その日はとても唐突に、全く何の前触れもなく、私の前に
現れたのです。ですが、その唐突さ以上に、私を驚かせたものがござ
いました。お二人の恋物語へ終止符を打ったのは、私の想定していた
主人の事情ではなく、他ならぬ光る君の方からであったのです。

その日は、穏やかな雪の降る、年の暮れの一日でございました。夕
食の支度を進める厨房を監督しつつ、深々と降り注ぐ雪の花を見てい
た私は、今頃お二人が、うっすら雪の積もった道を、仲睦まじく並ん
で、サクサクと雪を踏み締め歩いているのだろうと、そんなことをぼ
んやりと考えておりました。

丁度その時、玄関の扉が開いたのです。急いでお迎えに上がると、
寒さのためか、やや鼻の赤い主人が、玄関へ立っておりました。

「ただいま、帰りました」

いつもと変わらない帰宅の挨拶が、なんだか少し、湿っぽい気がい
たしました。それに、よく見ると、主人の後ろには、光る君が立って
おられたのです。

お二人が、学校よりの帰りをご一緒されていることは、当然存じて
おりました。ですが普段は、何か特別の理由がない限り、光る君は別
邸の正門の前まで送るのみで、玄関までお見えになることはありません
。これは、家の者に、お二人のご関係がばれないようにと、私から
お願いしたことでございました。

雪が降っているとはいえ、ここへまで光る君がおいでになったこと
へ、私は内心、何かあったのではと身構えたのです。

「送ってくださいって、ありがとうございます」

「お礼には及びません。それでは、自分はこれにて」

ですが、お二人は特に変わった様子はなく、お別れの挨拶をされておりました。制帽を浮かせ、会釈をして踵を返す光る君へ、主人は花のように微笑み、手を振っておりまして。雪の向こうへと、光る君のお姿が見えなくなるまで、見送っておりまして。

その時初めて、私は、主人の目に光るものがあつたことへ気づいたのです。主人は、さめぎめと、泣いておりました。紅玉のような瞳を潤ませて、真つ赤な頬へ涙を伝わせておりました。

「あの方は、アメリカへ留学をされるのよ。とてもすごいでしょう」
涙ながらの声は、とても誇らしげに、聞こえました。ええ、そうでしょうとも。財閥令嬢として、多くの教育を受けてきた主人は、本心と正反対のことであろうとも、実に気丈に、口にすることができのです。ですからこれは、誰よりも多くの時間を主人と過ごした私にしかわからない、主人の声だったのでございます。

聞けば、光る君の留学は、主人も随分前から、承知していたようでした。それ、これを、これまで告げなかったのは、お二人の最後の日まで、どうかこれまで通りに過ごして欲しいという、主人の意地であつたのでしょう。そして、その最後の日が、今日であつたのです。

留学ともなれば、短くとも数年の間、光る君は日本へお帰りにはなりません。あるいはそのまま、海外へ赴任ということも、珍しくはないと聞き及んでおります。そうなれば、もう、主人と会うことは叶わないでしょう。よしんば帰国が叶ったとしても、その頃には主人の婚約が、正式に決まっている公算が大きいのです。

主人と光る君の、今生の別れの挨拶は、たつた今しがた、実に穏やかに、交わされていたのでございます。

多くを存じ上げている訳ではない私も、お二人の仲睦まじさは、それはよくわかっておりました。お二人は、正しく比翼の鳥、連理の枝であつたのです。それほど深く、愛し合っておられたのです。

この時のお二人に、私は、光源氏と紫の上の別れを、重ねずにはいられません。最愛の人である紫の上を京へ置いて、遠き明石の地へと旅立たねばならなかった光源氏の、そのお二人の姿が、幾度となく頭を過るのです。旅立つ愛し君を、ただ見送らねばならない、そ

の悲痛はいかばかりであったのでしよう。

光る君の去って行った夜闇を、主人はいつまでも、見つめておりました。音もなく伝う涙が途切れるまで、一つの嗚咽も漏らすことなく、ただ静かに、見つめておりました。

こうして、主人の初恋は、美しい姿のまま終わりを告げ、儂く切ない思い出へと変わったのでございます。

……主人の恋物語について、私が語れるのは、ここまででございます。もちろん、他にもお話というのも、あることにはあるのでございますが……こと、光る君の旅立たれてからしばらくの日々に関しては、主人も語ることを望みません。ですから、これについては、私が墓場まで、持っていく所存でございます。

……それに、この恋物語の続きは、私ではなく、主人が——いいえ、私の友人が、きつと、自ら紡いで、そうしていつかのように、語って聞かせてくれるのだと、私は信じております。

「ご覧になって、愛さん。船が来ましたよ」

友人が指さす先には、先日、北太平洋航路に就役したばかりの貨客船「なぎさ丸」が、今まさに、横浜の大棧橋へと、横付けるところでございます。

「行ってくるわ」

「いってらっしゃい、かぐや」

大棧橋へと、まるで在りし日の、恋をしていた少女のように駆けていく友人を、私は笑顔で見送るのです。私は今こそ、彼女の幸福を確信し、心の底から、寿ぎ、喜ぶことができます。